福島訪問の記録

・・・対話小フォーラムｄ「女性農業者の交流を通して」・・・

日 時　2013 年　3 月 15 日 ～17 日
訪問先　福島市と伊達市霊山町小国

訪問者
　北海道女性農業者ネットワーク
　きたひとネットの 6 人
　吉田省子（北大農：後列左端）

主催　RIRiC 2　「市民参加型で暮らしの中からリスクを問い学ぶ場作りプロジェクト」
JST 科学コミュニケーションセンター平成 24 年度採択企画
発行日　平成 25 年 4 月 4 日（木）

断り書き：RIRiC2の考えるリスクに関する科学コミュニケーション

私たちは様々な危害要因（ハザード）に取り囲まれていますので、ハザードの特質やそのハザードに根ざすリスクの本質を知ることは、21世紀のこの社会を生き抜く上で大切なことだと思われます。さらに言えば、RIRiC2では、リスク問題を考える際には、情報の豊かな側からの理解増進活動だけではなく、リスクをめぐる様々な動きへの市民参画もまた必要だと考えています。

RIRiC2は、トップダウンで教えてもらう場とは異なる対話の場を提案しますが、全てをRIRiC2が準備するのではなく、場を整える媒介・お手伝いする者として振舞います。つまり、市民自らが専門家の助言を受けながら、対話や語りあいを含む学びあい（peer learning）を通じて、必要とされる「そのリスク」に関する科学コミュニケーションの場を作り出すことを、支援します。

福島訪問について

時の経過と共に記憶は風化するし、現場からの距離によって受け止め方が異なるのはやむを得ません。しかし、だからといって、福島での暮しの問題や汚染された農地で農業は営めるのかといった問題を考えなくていい、とはならないと思っています。

RIRiC2の小林は、2011年3月中旬以降、福島大学の研究者と農地汚染と営農の問題に関わっています。さらに吉田は2011年8月以降2012年12月までの間に、札幌の消費者と福島の消費者や生産者を結ぶ対話の場を作りました。実は、福島県生協連合会の佐藤一夫専務理事を介し、「かあちゃんの力プロジェクト」が立ち上がったと聞いた時、北海道女性農業者ネットワークきたひとネットの中村由美子さんに「つながることはできないだろうか」と相談しました。それから1年がたち、昨夏誕生したRIRiC2の企画の1つとして、きたひとネットのご賛同をいただいた上で、6人の福島訪問が実現しました。

本報告書は、福島の方たちの話に耳を傾け、聞きあい、語り合い、一部の地域とはいえ現状を見てきた感想文集です。お世話になった「かあちゃんわぃわぃふるさと農園」の皆様、かあちゃんの力プロジェクトの皆様、直売広場ディスカバリーやミネロファーム、植木農園の皆様、小国の「放射能からきれいな小国を取り戻す会」の皆様、「小国やまぶき おしゃべりサロン」の皆様、福島大学の小山先生、塩谷先生、朴先生、石井先生、小松先生ほか、そして誰よりも参加したかった中村由美子さんに、お届けします。

かあちゃんの力プロジェクト（あぶくま茶屋）

小国おしゃべりサロンのみなさん

（文責　吉田省子）

ふくしまを知ろう・語ろう：女性農業者の視点から

「市民参加型で暮らしの中からリスクを問い学ぶ場作りプロジェクト」では、福島大学准教授小山良太先生のご協力のもと、下記の日程で、福島と北海道の女性農業者同士が出会って「未来をみつめて：暮らしと農地と農業」というテーマで、情報共有と意見交換の場を設けました。

１．かあちゃんのカプロジェクトとの対話

【日時】3 月 16 日（土）　9：30～13：30

【会場】コミュニティー茶ロンあぶくま茶屋　福島市松川町金澤字船場 3－27

【内容】学習　10：00～11：00・・・かあちゃんわぃわぃふるさと農園（福島駅前）

レクチャー　塩谷弘康先生（福島大学人文社会学群教授）

小松知未先生（福島大学

うつくしまふくしま未来支援センター　特任助教）

移動　11：10～11：40・・・うつくしまふくしま未来支援センターの車 2 台

運転　小山良太先生と朴相賢先生

対話　11：40～13：40・・・低カロリー特製弁当をいただきながら情報交換

課題　放射能汚染下で農業にどのように向き合ったか　＋　北海道の視点から

【参加】北海道女性農業者ネットワークきたひとねっと 6 人、福島大学の諸先生、かあちゃんのカプロジェクトの 3 人、吉田

２．見学と意見交換

【日時】3 月 16 日（土）　14：30～16：30

【会場】みさと直売広場ディスカバリー、ミネロファーム、教育ファームの植木農園（北海道大学出身で酪農と米作り）、　農場の現状＋風評被害とは

【参加】きたひとねっとの 6 人、福島大学の諸先生、植木農園の植木さん他、吉田

３．交流・親睦会　3 月 16 日（土）　19：00～

４．伊達市小国地区の試験栽培実態調査と意見交換

【日時】3 月 17 日（日）　9：00～14：40

【会場】伊達市霊山町小国地区　集会場

【内容】交流　9：30～12：30　会食 11：00～

石井秀樹先生講演

作付け制限区域でのコメの試験栽培　＋農産加工の現状

小国視察　12：40～14：20

【参加】きたひとねっとの 6 人、福島大学の諸先生、放射能からきれいな小国を取り戻す会と「小国やまぶき　おしゃべりサロン」の皆様、吉田

※　午後 2：40 頃に福島駅に戻る（3 名）。先発隊 11：30 に出発（4 名）、

※　昼食（おしゃべりサロンのみなさん）が準備してくださいました。

１．報告書

「きたひとネット」
高　村　洋　子

福島第一原発事故災害は終わっていない！
福島阿武隈地域と小国町かーちゃんの心をそえて。

私達が作る農作物は「食べることも、さしあげる事も、売る事も」出来ない！

３月１５日、始めて降りた仙台空港は、一昨年の３．１１津波被害を受けた姿の面影はもう無かった。乗り継いで目的地の福島駅も、穏やかで「変わらぬ佇まい」と目に映った。私達、北海道女性農業者「きたひとネット」メンバー６人は、２月からこの日の為に家業の調整を始め、それぞれに現地集合した。

揃ったのは、１９時００分頃、ペコペコのお腹を満たすべくリサーチ好きのメンバーが見つけた、「ご当地メニュー」豊富なお店へ。第一声、とうとう来たね！早速注文した土鍋ご飯、イカ人参、サバのへしこ、etc、どれも美味しく心まで満たされた処で、明日からの訪問先へのお土産として持ち寄った、会員それぞれのご当地自慢を分け入れ「福袋」とした。（若者組はその後又、街へ繰り出し「円盤餃子」も食べたとか？）

２０１１年１０月、福島大学の教員が飯舘村（全村避難）の渡辺とみ子さんに声をかけ、始まったかーちゃん（阿武隈地域から避難している女性農業者）探し。しかし個人情報保護が障壁となり、自足で口コミを頼りに集めたメンバーで立ち上げた「かーちゃんの力・プロジェクト」。地域にある食の伝統、コミュニテイの絆「結」（葬儀等々の手伝い、てまがい）。今残さないと避難している間に途絶えてしまうのではと言う危機感を持ち、スタートした。食べる事の大切さ！作る自分が元気になる！元気が健康な人を作る！人が地域を福幸（復興）する！。此の後は、土地を求め自分達が育てた野菜で、「胸を張れる」加工・販売をしたい。それが、阿武隈地域を含めた福島の食と農の再生になると。「何を言われても最後までやる事！」と、とみ子さんは言う。今の主な活動は、福島駅近くに構えた「かーちゃんふるさと農園わぃわぃ」での直売、あぶくま茶屋での「笑顔、健康弁当」作り、イベント、軽トラ市等々。特記すべきは、とーちゃんを「おつれ上手」と巻き込んで（長い年月、農を共にしたパートナーの姿を観て来た人の応援）協働している事です。

次に訪問したのは、北海道大学出身の植木農場、場主から紹介頂いたＮＰＯ法人FAR－Net が復興牧場として運営している「ミネロファーム」。被災酪農家（全村避難）を雇用しコミニュテイの形成と酪農の復興を目指しています。牧場責任者の田中氏は酪農を開業し、ようやく軌道に乗り始めた１０年目に被災し廃業を余義なくされた。（開拓者の両親を観て来た私は涙に声をつまらせてしまった）しかし彼のモチベーションの高さに共感したものは、「牛飼いが牛を育て、牛に牛飼いが支えられている」事でした。

ネクスト訪問は（株）元気村農産物直売所「ディスカバリー」。代表の乃里江さんは北海道大学出身の小柄でありながらも言葉に力を感じる女性でした。、今もって放射能空間線量がネックと言う。風評被害の連鎖で経営難に悩み、現在は産地が違う品物も扱いながら、味噌、豆腐、油揚げ等々自ら栽培している米、大豆の加工・販売に精進しておられた。（近々、友人に会う為札幌に来られるとの事）そして、いよいよ

植木農場（米、肉牛兼業農家)。敷地内には数棟の「蔵」にメンバーは目を輝かせ興味津々、無理をお願いして内覧となり候。広い縁側、大きな神棚とお仏壇のあるお宅で、ティータイム。場主（パートナー募集中の４８歳）は、苦しい時こそ笑って、元気に！と自ら作詞、振付を担当した「モーモーミルクパラダイス」をＣＤ化され、地域や避難している方々を元気にしている。目標は「ＮＨＫ紅白歌合戦出場」だそうです。しかし、もう一面に見えた本質は TPP 問題や日米の関係を熱く語る、政治評論の旧家名主でありました。

最後の訪問先は、山あいの里伊達市小国地区です。「小国やまぶき　おしゃべりサロン」代表の第一声「多くの福島県人を温かく迎えて頂いている北海道の皆様に感謝しお礼申し上げます。」(かーちゃんの力・プロジェクトのとみ子さんからも同じ言葉を頂いています。）でした。そして、私達は「これまで里山の恵みを授かり、四季の移ろいと共に生活していた」が原発事故後、生活が一変し，あらゆる物が放射性物質に汚染され「食べることも、差し上げることも、売ることも」出来なくなった。原発から離れる事５５㎞の地域に汚染が高いのは何故？と言葉が続きました。しかし、国、行政の対応は一向に進まず、地域コミュニティーは崩壊現象が起きて来た。避難勧奨世帯と非指定世帯間の財政的格差、汚染物質の仮置き場を巡る混乱等、

ここでも福島大学の存在は大きく「放射能からきれいな小国を取り戻す会」の設立、やまぶきおしゃべりサロンのボランティアと共に活動しています。

平成２４年１２月１４日に特定避難勧奨の指定解除となっていますが、空間線量があり農業者が長時間作業出来ない事、作物を作っても食べてくれる人がいるのだろうか？（風評被害）子供や孫たちも食べてくれないし、子供、子供世帯が自主避難等で激減している、生産意欲が涌かない。など今もって大きな課題が現在進行中でした。そんな中で、訪問した私達に「おもてなしの心」を誇りとした、お持ち寄りのとても美味しい昼食を提供して下さいました。勿論全て検査済の野菜の惣菜、お漬物、おにぎり等など食べきれない程のご馳走でしたがそこは、北海道の女性農業者「働き者」集団でしたから、しっかり残さず「気持ち」まで全部頂いちゃいました。

結びに

・復興（福幸）のキーパーソンは女性の力である！

・ 命に関わる「食と農」、人を司る「知、心、体」をマネージメント出来るのは女性の力である。

・ かくも恐ろしい「見えない。感じない。臭わない。」放射能汚染被害の現実を目の当たりした、この地域で復興（福幸）を誓い、愛する故郷から避難を余義なくされても、無くしかけた気力をもう一度奮い立たせ、食の伝統、地域にあったネットワークが一人ひとり又つながり始めた。誰が道を開いてくれた訳では無い。みんな女性が自ら持っていた潜在能力がそうさせたのです。
そして、男性もおつれ上手に巻き込んで阿武隈地域、福島県と大きい括りで本当の復興（福幸）に歩んでいる。

・ 産学連携とよく耳にする言葉ですがそのものズバリ！大学と産業者が本当に良く機能、発揮されていると感じています。とりわけ、大学の准教授の小山良太氏（小山氏が北大生であった時からのつながり！）の尽力は大きく一緒に動いて下さっている、法学専門の塩谷先生、、石井先生、小松先生、のチームワーク。そして、私達「きたひとネット」と福島をつないで下さった北大の吉田先生、福島訪問の行程全てを企画、最後まで足になって下さいました小山先生、朴さん本当にお世

話になりました。私達はこのお骨折りを肝に銘じ必ずや福島のかーちゃんと北海道のかーちゃんの出会いを、「耕し、広げ、繋いで、紡いで、育んで、行っていきます。」

・ ワクワクして出会って、話を聞いて、悔し涙を流して、今を笑って、共感して、もっと時間が欲しいと願った２日間でしたが、グッタリ！疲れました。（感情移入ですね！）ですがこの報告書を書きながら、疲れが新たなエネルギーに変わりつつある事を添えます。

最後になりましたが、一昨年３．１１東日本大震災は、そこから始まった原発問題は男性が中心に築いてきた、脆弱な日本社会の現れとなりました。雇用機会均等、男女共同参画を謳われ久しい昨今ですが、女性に厳しい環境は今！尚続いています。（今回訪れた地域でお会いした女性農業委員はお二人だけでした。）脱原発も男女平等も、女性の声は反映されていません。
国と行政のポジティブアクションの必要性をあらためて強く感じている所です。

福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの車

２．ふくしまを知ろう・語ろう：女性農業者の視点から
テーマ　「未来を見つめて：くらしと農地と農業」
報告者　　美唄市　吉村　俊子（きたひとネット、事務局）５５歳
　　経営形態：　水田、転作小麦等
　　趣味：　読書、郷土史研究、ドライフラワー加工等

まず始めに、今回のプロジェクトを企画・実行していただきました、吉田省子さま、小山様、塩谷様、小松様、石井様、運転していただいた朴様、また交流していただいた、各視察先の農家の皆様に心より感謝申し上げます。

３月１６日、午前
　福島駅前のかーちゃんのふるさと農園で、塩谷先生と小松先生によるかーちゃんの力プロジェクト全体の説明と放射能汚染地域と作物の現状などを学びました。ＪＡや支援者やＮＰＯ、行政などが有機的に結びついている環境にあることが理解できました。
　笑顔弁当、結もちなどの加工で、雇用と生きがいを生み出しています。また、このような拠点施設があることで、内外問わず人々を集める事ができます。この度の震災後あった原発の事故が、福島の食文化、しみ豆腐、山菜、干し柿など昔からの加工品が出来なくなって、お年寄りや女性たちが受けた、精神的な喪失感はわれわれにもわかりました。

３月１６日、かーちゃんの力プロジェクト皆さんと阿武隈茶屋で交流しました。飯館村、浪江町などから、避難した方たちが以前からある技術の伝承や、各自の使命を果たすために活動している拠点直売所であります。リーダの渡辺さん始め、皆さんが快く迎えてくださいました。その中で石井絹江さんからメッセージがありました。農家とくに酪農家は、いまでも精神的にも肉体的にも相当なダメージを負っていることがわかりました。かーちゃんが立ち上がったのは、じっとしていられない、あきらめたくない、生きる力そのものだったのではないでしょうか。
　またここでは、弁当はじめ商品の放射能検査を自主的に行っていました。併設している、検査施設を見せていただきました。その廃棄物の量は想像を上回るものでした。１キロ当たり２０ベクレル以下である事を確認して、自信を持って販売しているとのことです。（シールを貼る）
　お昼のお弁当や、手づくりのおやつなどをおなかいっぱいごちそうになりました。早く自分たちで野菜や米などの原材料が作れるようになることを願っています。

３月１６日、午後
　松川町の植木さんと合流し、みさと直売広場ディスカバリーで視察しました。周りが住宅街で恵まれた販売環境です。　その後ミネロファームで牧場責任者の田中さんから話しを聞きました。災害からの復興を目指す農場です。環境保全や体験ファームなど、社会貢献も兼ねています。その後同じく教育ファームの植木農園さんを訪問しました。北海道ではあまり見ない、土蔵がいくつもあって、一同興味津々でした。中も見せていただきました。敷地内に熊野神社がありました。植木農場は稲作と肉牛の複合経営です。籾のままの米を粉砕して飼料として牛に与えていました。また、牛に音楽を聞かせていました。モーモーミルクパラダイスという曲を作り、紅白出演を目

指しているそうです。お宅にお邪魔しました。植木さんは、日本の農業政策がおかしな方向へ行っていると力説していました。

３月１７日、午前

２台の車に乗り込み、霊山町小国地区へ行きました。途中、安達太良の山に残雪がウサギの形に残っている景色がありました。この地方の種まきの季節の目印だそうです。小国町に入るとすぐに、放射能汚染物の中間保管施設の囲いがありました。除染作業で剥ぎ取られた、土や草や落ち葉などをフレコンに詰めて、住民の目が届く、畑や水田に並べて、黒いシートがかけられていました。空気抜きの煙突もありました。小学校のすぐ横に並べられているのはショックでした。普通は山の中とかの人目につかないところに置くものをみんなで監視するように、置かれていて、住民意識の厳しさを感じました。昨年までは米の作付けを制限されていたようです。平成２３年９月、放射能からきれいな小国を取り戻す会という組織をつくり活動しています。福島大学の石井先生たちの支援もあり、データーの収集でマップを作成したり、土壌調査や放射能測定所の開設など、自分たちで行動しているところが素晴らしいと感じました。

また、住民が一丸となってふるさとの素晴らしさを守り行動することが、良く手入れされた田や畑を見て感じました。地域の集会所で、皆さんの持ち寄りのおかずで昼食をご馳走になりました。

全体の感想

１．福島第一原発事故の影響の大きさ、現場の苦悩は伝わっていなかった。ということがわかりました。

２．農家は農地を追われると、働く場を失い、意欲をなくす。立ち上がるには人と人のつながりが有効となる。お金だけでは無理である。

３．百姓として生まれたからには、普段からその土地へ愛情をかけていないと、いざとなったときに良さを伝えられないと感じた。福島の人々から土地への愛情を感じたからである。

４．励まし、提案する、まではいかないけれど、一緒に笑えて良かった。共に進めていこう、振り返りながら、一歩一歩。そうすることで、たすきを渡す相手が見えてくるのではないかと思う。

５．研究者と行政関係、地域住民や産業などの関係性や、思惑など調整が遅れているのは、人々の回復に個人差があることが関係しているのではないかと思う。怒りも悩みも、同じ方向へ向いていければ、解決策を話し合えるのではないかと考える。道なき道を進む小国地域の住民の団結は、小国産業組合の祖、佐藤忠望氏の時代から根付いていたかもしれない。　明治三十三年日本初の産業組合ここから始まる。

６．ふるさとは、南北朝の時代から続いているという、北海道はせいぜい百年の開拓の歴史ですから、歴史が違うのですが、福島の苦悩はいつまでも、語り継がなくてはならない。

以上

佐藤会長と

３.「女性農業者の視点からふくしまを知ろう、語ろう」プロジェクト　行動報告

植田　喜代子

実施日：平成 25 年 3 月 15 日（金）～　3 月 17 日（日）
視察先：かーちゃんの力プロジェクト活動拠点 2 ヶ所
植木農場さん周辺（直売所、ＮＰＯ法人牧場、植木農場）
小国地区（「放射能からきれいな小国を取り戻す会」「安全安心委員会」「小国やまぶきおしゃべりサロン」）

＝はじめに

テレビや新聞からの情報しかもち得ない私たちですが、何に使われるかわからない募金をするしかやれることはないのか・・・自問自答する中で今回のプロジェクトを知り、迷うことなく参加を決めました。しかも訪問対象が、飯館村からの避難者が中心となってたちあがった女性農業者のグループであること、自らの生活の場を守ろうと自主的に活動を始めた地域の取り組み事例であることは、私自身が現在抱える課題解決の一助になると、学びのチャンスをいただいたことに感謝しながら、旅支度にかかりました。

＝現実を目の当たりにして・・・

○　想像もできない事態に直面した時、ひととしての“芯”が問われる。

非常事態に直面した時、自分のたち位置を認識し、ひととして優先すべきものを選択できる能力、その強い心は、「いつもの」生活の中で粛々と培われる・・・かーちゃんの力プロジェクトのメンバーの言葉からも、小国地区のかあさんたちからも、そのことが伝わってきました。そして、人としての強さ、それはとびっきりの優しさとイコールであることも言葉の端々に感じられ、”返す言葉“に迷ってしまいました。そんな自分を恥じ入りながら、この経験を絶対活かすと強く思いました。

かーちゃんの力プロジェクト→「ふるさとは原発によって様変わりし、多くの仲間はちりじりになったけれど、ふるさとの暮らしの中で培った生活技術、味はなくしたくない」それが母ちゃんたちの行動の原点でした。一番のこだわりであったであろう食材は、放射能との闘いでやむなく自家産とはいかなくても、体が覚えた調理技術と、食べる人への思いは、安価で安心な弁当や加工品を誕生させていました。　　＝旧来、生活技術のおおくは女性が担っており、しかもおおかたが“評価”とはほど遠い位置づけにありました。特に農村部でそれは顕著で、加工や直売等、起業化や六次化といった動きで経済的価値が見直されたとはいえごく一部に過ぎず、「家族のため」「ご近所のみなさんのため」に費やされる母さんたちの頑張りは、若い世代の一部には敬遠される傾向があります。女性に限らず生活技術を身につける、そんな当たり前のことの積み重ねが、結果、生きる力となり、自分と同じに他者も大切に思う強い心を育てると、母さんたちから学ぶことができました。

伊達市小国地区の取り組み→　小国地区にはいり「昔は養蚕が盛んだったんだなぁ」「山が迫っているから、山菜やきのこもたくさんとれるんだろうなぁ」と、車窓からののどかな山郷の風景を楽しんでいました。ところが、黒い袋の山が目に飛び込んできて、この地区のおかれた状況が尋常でない事を感じました。とりもどす会の活動経過をうかがうとさらに、“怒り”をおぼえる理不尽な支援体制に、政治にたよらず自らが立ち上がろうとした思いも、いただいた資料の「いくら考えていても、行動しなくては変わらないことがよくわかりました」という言葉とともに、ズシリと響きました。

自ら地区全体の汚染状況を地図に落とし込み（えっ！国でやらなかったの・・・ですが）、地区の会館に放射能測定所を開設して、口にするものの一つ一つ、圃場の一枚一枚、調理方法による

違い、作物による違い、丹念な作業をメンバー自身が分担して実施し、データとして誰にも目で見えるように情報開示していることなど、「この地区で住み続ける」ための惜しみない行動には頭が下がります。作付け制限解除された今後は、目に見えない空間線量との戦いがクローズアップされ、また新たな火種が生まれそうですが、お母さんたちの他者を思い遣るたおやかな強さで、乗り越えて欲しいと願ってやみません。

＝私の住む地区は行政主導の自治会運営が長く続き、自治力は衰え、そのうえ自治会イコール戸主会で、女性の声など挟む余地がない集落です。あれよあれよという間に戸数 10 戸、うち 7 戸は 60 歳以上の夫婦世帯となりました。もう、行政が何とかしてくれるのを待っている余裕はない。数少ない若者や女性の声、知恵を動員して自らの暮らしを自らプランニングしないと・・・と私は危機感を募らせています。小国地区のみなさんの、老若男女おのおのの能力と得意技を生かしてリスクに立ち向かう姿に、自治力を見ました。

程遠いことですが、自らの地域の課題は自らの力を寄せて解決する力をつけられるよう、小国地区の事例をこころに刻んでおきたいと思いました。

住宅地の中の直売所・ディスカバリー、北海道育ちの牛たちが頑張っているミネロファーム、その元気の源は？を問いたかった植木さん、いずれも、応援しなければならない私たちが、かえって元気をもらってしまった視察先でした。折りしも、ＴＰＰ参加交渉に入ると発表があった日。科学音痴の私には放射性物質も、国のやろうとすることも、いずれも正体不明。「そんなときは目の前のやるべきことを、ただ粛々とやるだけ・・・人として、農業者として」。このことばも今回の収穫の一つです。

福島大学の皆さん、小山先生、石井先生、お世話になった皆さん、一日も早く「いつも」の生活、風景が帰ってきますようにお祈りしております。ありがとうございました。

北海道紋別郡湧別町東芭露　　植田喜代子　　（酪農）

４.「女性農業者の力福島と北海道」に参加して

那須　美由紀

今回、北海道大学大学院農学研究院並びに、福島大学のご支援の下、きたひとネット役員 6 名で福島を訪ねることが出来たことに、まずはお礼を申し上げ、心から感謝させていただきます。本当にありがとうございました。

2 年前の 3 月 11 日以降、東日本大震災並びに、原発事故の被害に遭われた東北の方々の事を気にしてはいても、報道メディアでの情報が私にとっては唯一の“知る”手立てでしかなく、今回直接福島に出向いて、生の声のお話を聴けた事が、まさしく夢のようでした。

＊3 月 16 日 9：30～　　於：かーちゃんふるさと農園　わぃわぃ

福島大学　塩谷先生から、『女性農業者（かーちゃんたち）の力を活かした阿武隈地域の復興』ということで、お話を伺いました。震災後約半年が経過した 10 月に、福島大学小規模自治体研究所が中心となり、『かーちゃんの力プロジェクト協議会』を立ち上げ、あちこちに避難している女性農業者を探しだす事から始まったそうです。避難先で女性農業者を訪ね、それぞれの想いを聴いていく中で、「支援をもらっているだけではなく、もう一度自分達で何かを作りたい！」との声が上がり、みんなでやれば、出来るのでは…という思いで、やれる事から形にしていったのだそうです。このプロジェクトの基本理念は“食と農を通じた地域の復興と再生”で、主な活動は①農産加工品の加工・販売　②かーちゃんの笑顔弁当づくり　③あぶくま地域の食文化伝承です。

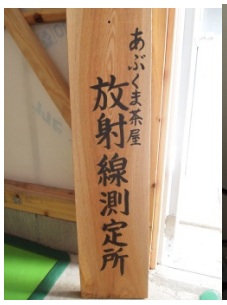
かーちゃん達は、笑顔を取り戻し、元気になってきたそうですが、まだまだ課題は沢山あります。やはり、原材料の生産から携わるための農地をどうするか。あぶくま地方の伝統食文化である、しみ文化（しみ豆腐・しみ餅・しみ大根など）は、現在空間線量が高い地域ではセシウムが濃縮してしまうため、作ることができない。県の緊急雇用対策では、雇用できる人数が限られる。など、女性農業者の経営の自立までには、クリアすべき問題が山積みです。

＊3 月 16 日　12：00～　　於：あぶくま茶屋

かーちゃん達の活動拠点であるあぶくま茶屋で、とても、とても、美味しいお弁当をいただきながら、会長の渡邊とみ子さんと、調理担当の 2 名のかーちゃんとの懇談をさせていただきました。お弁当は、野菜がふんだんに使われ、味も、栄養バランスも、見た目も素晴らしいものでした。カロリーは約 500kcal で、塩分はたった 2ｇ。このお弁当でなんと！渡邊さんは 15 キロもダイエットに成功したそうです。（蛇足でした…）ここからは、本音のおばさんトーク炸裂です。渡邊さんは震災前から、飯舘村で農業のかたわら、加工場で、クッキーや、じゃがいも、かぼちゃなどの加工

を手がけ、他に「飯舘ベイク」という飯舘在来種のじゃがいもの種芋の検査員もされていたそうです。震災後、全村避難という事態になってしまいましたが、「農地はないが、技術はある」と頑張る渡邊さんに、ご主人が「お前はよくやっている」と褒めてくれた時、それまでの苦労が報われたように涙があふれた…とのお話には、思わずみんなもらい泣きしてしまいました。ここで、頑張っている皆さんは、仮設住宅に住み、家族がバラバラに暮らしている方もいました。手作りのキムチや、かりんとうもいただき、暖かいおもてなしに感激でした。

　放射性物質の検査には、日本の基準値は 100 ベクレル以下とされていますが、かーちゃんのカプロジェクトでは 20 ベクレル以下（1ｋｇあたり）と、厳しい自主基準を定め、それをクリアできた物にだけ、ロゴ入りシールを付けて販売しているそうです。検査の為に、毎日 3～4 個のお弁当をつぶさなければならないそうで、経済的負担も大きい現実があります。



たくさんの課題がある中、食べ物を作るという事を通して、自身も、まわりも元気にしていくかーちゃん達に、心からのエールを送ります。そして、私達もたくさんの元気と勇気をいただきました。

＊3 月 16 日　14：00～　農家直売所「ディスカバリー」視察

　この後に訪問予定の植木農場の植木さんと待ち合わせをして、松川町の直売所に行きました。このあたりの何件かの農家で経営しているものの、原発事故以来、お客は激減。

それでも、セシウム量を測定しながら、安全な物を提供しつつ、お店を続けているそうです。地元でも風評被害は根強いそうです。

＊３月１６日　１５：００～　復興支援牧場　「ミネロ牧場」視察

「ＮＰＯ法人　福島農業復興ネットワーク」＝FAR-Net　で運営しているこの牧場では原発事故で離農を余儀なくされた酪農家の方々が働いていました。事故当時の生々しいお話に、同じ酪農家として胸が張り裂けそうでした。牛を処分し、施設も農地もそのままに、避難生活する中で、このような牧場が立ち上がり、希望が生まれた事でしょう。
ここでの事業目標は、　①集約型酪農経営モデルの実践　②被災酪農家の雇用創出
③福島県酪農の復興と生産基盤の確保　④酪農の持つ多面的機能の発揮
⑤エコロジカルファームの調査と発展

＊３月１６日　１６：００～　植木農場　視察

午後からの視察研修の案内役を買って出てくれた植木さんは、北大 OB で、松川町の市街地でお米作りと肉牛の育成をされています。飯舘村や、浪江町から避難している方々を元気づけようと、歌やダンスなどのイベントを企画したり、交流会などを行っているそうです。植木さんの明るさや、元気さは、きっとみなさんを楽しい気持ちにさせていることでしょう。

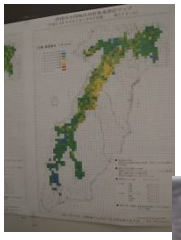
＊３月１７日　１０：００～　伊達市霊山町小国地区　学集会と対話

車窓から見える景色は、昔話に出てくるような里山の美しい風景でした。
小国ふれあいセンターにて、「放射能からきれいな小国を取り戻す会」の皆さんが、出迎えてくださいました。
「この小国地区はたくさんの矛盾に苦しんでいます。」小山先生の言葉が重く胸に沈んでいきます。　原発から約 55Km も離れた稲作中心の農村に、大量の放射能が降り注ぎ、生活が一変。仕事も、地域コミュニティーも、生きがいも、すべてが危機的状況に陥ってしまいました。遅々として進まない国の対策に、行政の対応を待っていては、何の解決もしない…。と、自分達で詳細な線量調査をしよう！と、平成 23 年９月に『放射能からきれいな小国を取り戻す会』が設立されました。
活動内容は①放射能汚染の実態を明らかにする～空間線量の測定・線量マップの作成配布

②安心して食べられる食物検査体制の確立～「おぐに市民放射能測定所」の開設
③福大を核とした研究機関との連携～地区内の水稲試験栽培の協力と実施
④区民会との協調連携～会員の土壌調査の実施

などだそうです。しかし、あまりにも大きな、際限のない戦いに、どう取り組んでいけばいいのか、活動の限界も感じているとの事。作付け制限後、顕著になった、生産意欲の減退。いくら、線量が安全だと計測されても、子供も、孫も食べない農作物に対してむなしさだけが先行する…。
お話をお聞きしながら、本当に、言葉を失いました。
報道では分からない、福島が抱えている“本当のこと”が、ここにはあるのだと思いました。
せめて、私ができるのは、目に見えない“放射能と言う魔物”と向き合い、戦わねばならない皆さんの事を、出来る限り自分のまわりの人々に伝えていくことだと思います。

大変な状況の中、小国のお母さんたちが、手作りのお昼ご飯を用意してくださり、心からのおもてなしをしてくださいました。
おいしくいただきながら、感激で胸がいっぱいになりました。
同じ日本人として、こんなにステキな地域を崩壊させてはいけない！と、強く、強く思いました。
飛行機の都合で残念ながら、その後の圃場視察には参加できませんでしたが、
今回の出会いを第一回目としてまた、今後も、ぜひ交流を深めさせていただきたいと思っています。今回参加できなかった、我が“きたひとネット事務局長
中村由美子さん“と共に、次回は訪れたいと思います。
最後になりましたが、福島大学の小山先生、並びに諸先生方、北大の吉田省子さん、出会う事のできた福島のみなさんに感謝いたします。ありがとうございました。



５．福島視察・交流を終えて

要覚　忍

「何しに行くの？」「何ができるの？」「その旅費を寄付した方が喜ばれるのじゃない？」等々私が福島に視察交流に行くと告げた時の周りの反応です。

私自身、原発の被害、全村避難、出荷制限の事はメディアを通じての知識しかなく、自分の身に置き換えて考え、何を言ったらいいのだろう？との不安を抱えての福島行となりました。

天気がよく下北半島の形がはっきり見え、八甲田山、十和田湖、真ん中にある奥羽山脈山と山の間に街がある風景、被害にあったであろう海岸線、機内からみる景色はあまりにも平和で不思議な気持ちになりました。

福島駅は立派で豪華で、道行く人々は普通で（当たり前の事ですが）原発災害での避難または風評被害で農作物を作れないという農業者の苦しみは感じ取れず、都会だな、というのが第一印象ですが、街中の公園に「この公園は除染されています」との立て看板、これを見るたびに市民の方は汚染を受けた土地だとの思いを持つのでしょう（なんて嫌な響きでしょうか汚染・・・）

あぶくま茶屋での渡邊とみ子さんのお話、いままで何回同じ事をお話しされたのでしょう、嫌なこともいわれたでしょう、怒り・苦しみ・あきらめ・涙、色々な物を飲み込み乗り越えてきた方のお話は身に染みました、心に響きました、「この災害を忘れないでほしい」
「同じことがまたどこかで起こるかもしれない」の言葉を噛みしめました。

渡邊さんがおっしゃった「被害者だけど汚染された食材を提供したら加害者になる」崇高な気持ち！国にこの気持ちは届いているのでしょうか？感じてくれているのでしょうか？その場にいた私は憤りと悔しさで胸がいっぱいになりました。それでも時折笑顔を見せて旦那さまの優しさを話してくれる渡邊さん、この笑顔で「がんばろう！」と思った方はたくさんいたのでは？女性は最初から強いわけではなく、強くなければ生きて行けない、前を向いてちょっとずつ歩き出さなければ倒れてしまう・・家族を守るのは女性です。

二日目にお伺いした小国地区でのお話、持ち寄った食材での心温まる昼食、食べきれないほどのお菓子に漬物、地域の女性部の集まりとかぶりました、この今迄普通に暮らしていた地域に降りかかった放射能と云う名の毒・・・どんなに嘆き苦しんだことでしょう、１００％悪いのは国です、安全は国が守るものと信じていたのに、一事起これば対応はお粗末、自分たちが立ち上がらなければと、汚染の実態を明らかにし、出荷制限をし、食物検査体制の確立等様々な活動をされる中、会長のおっしゃった「米を作っても子どもも孫も食べてくれない」という悲痛な言葉、同じ農業者としてなんといえばいいのでしょう、

土地は正直です、手をかけたらかけただけ応えてくれます、つぶすのは簡単です、ほっといたらあっという間に荒れ地となります「農業をやってるんじゃない、景観を守っているんだ！」重い言葉です。

私達北海道人はせいぜい５代目 100 年位の耕作地です。
「いつからここにお住まいですか？」の問いかけに「33 代目です」「南北朝の時代からです」の言葉に、土地への思いを感じました、先人たちが子孫のために山を拓き、耕してきたであろう土地、自分の代で駄目にしたくない、というのは同じ農業者として共感できる言葉です、わかっていないのですね！机に向かってパソコンを打っている方には・・・・、ただの土地に見えても、ただの土地ではないこと、いろんな思いと苦労で続いてきたことに気付かないのですね！！

その後水稲試験栽培の田んぼを見せていただくことになり、途中に、除染土の数の多さに驚き、

無粋な柵にげんなりし、家の周りの柿の木に収穫されずに残った実、どれを見てもこれからの果てしなき、道のりの厳しさに言葉も出ませんでした。
　国は地域の崩壊を望んでいるのでしょうか？自分で判断しなさい、いやだったら出ていきなさい！とのことでしょうか？
　解決の目途も立たず、愛着のある土地を離れられない、でも見えない放射能があり畑に出たらどれだけ被ばくするのだろう？生活空間ではどのくらい？個人の力ではどうすることもできないことばかりです。

　今回感想文（報告）を書くにあたり、メモを見返しながらも書くことができませんでした、面倒とか億劫とかではなく、何をどう書けばいいのかがわかりませんでした。もし自分が逆の立場だったら「かわいそう」とか「がんばって」なんて気軽に言ってほしくないと思います、かける言葉がみつかりません。
　私自身はこの福島での経験をたくさんの人に伝えていきます、終息宣言なんて簡単に出ず、苦しみながらも戦っている人がいることを伝えます。

そしてまた福島に行きます。

このような機会を作っていただいた吉田さん本当にありがとうございました。

６．ふくしまを知ろう・語ろう：女性農業者の視点から

深川市　溝口めぐみ

３月１６日、１７日の両日とても有意義な意見交換ができました。福島大学の小山先生をはじめとする先生方には大変お世話になりました。貴重な時間をありがとうございます。

ちょうど２年が過ぎＴＶでしか報道されない事実しか知らないが、現場ではどうなっているのか？農業者はどう生活しているのか？私も水稲農家なので気になっていました。
行ってみると、仙台空港付近は復興バブルといわれている新築住宅が多く、津波があったのもわからないくらいです。沿岸部は逆に復興進んでいなくひっそりしていました。
今回の研修先で心に突き刺ささりました。あの日から何も始まってなく・・・時が止まっている感じ。何もかもただ普通の生活さえも奪われてしまったんだという事。それでも前に進もうとしている方々に恥ずかしながら自分が励まされた気がします。

かーちゃんのちからプロジェクトでは、震災後から今に至るまでの経緯などを福島大学の塩谷先生にお聞きしました。
短い期間での女性農業者探し。震災前から、かーちゃんたちのネットワークがあったからこそ手を結んで今があるのだと思う。ネットワークの大切さを痛感。何もないところから何もスタートはできないと思うので。逆にネットワークがない人たちはどうしているのだろう？と思いました。悶々と日々しているのかな？
かーちゃんのプロジェクトでは、力強い姿に涙が出てきました。この環境で、その力がどうして沸いてくるのか？自分なら心が壊れていくかもしれないと・・・。
そこには仲間の力、未来へ向かう力なのかな？
かーちゃんたちの言葉。忘れないでいたいです。

・他人事と思わないで。
・まだ、何も解決していない
・お金に変えられないもの
・あきらめないこと
・負けない
・戻れないかもしれない
・時間がない
・個人の歴史を残しておきたい
・加工したくてもできないセシウム問題
・待っていてくれるから作れる。
・助け合い
・お互いにいらだちをぶつける。

とーちゃんも頑張り手伝ってくれるというので、また力もわきますね。
特産品の山菜や果樹（ゆず・梅・栗・ブルーベリーなど）が使えないが、いつか加工できるようにと願いも言ってました。お弁当にしても加工品にしても自主検査をしているのを聞き、これが現実なんだと思いました。毎日、お弁当を３個ぐちゃぐちゃにして検査。経費も掛かり過ぎますね。どこまでいつまで？と私でも思います。
おいしいお弁当にボリューム満点！！キムチに手作りかりんとうにお腹いっぱいでした。本当にごちそう様です。
たくさんの野菜を使い、素材の味を生かして（北海道は何でもしょうゆ味しかならない）

体にも優しく食の遺産ですね。無くしてほしくないですね。郷土料理！！！

植木農場さんでは、明るい人で面白く農業に情熱を燃やしていました。
視察に連れて行ってくれた直売所「ディスカバリー」では多くの品物もおいており、地元になくてはならないですね。お醤油や大豆、麹など買いました！
植木さん宅の蔵には大変驚きでしたね。道内の酪農家さんの仲間に「ミルクパラダイス」を聞いてもらいますね。
その次に、「ミネロ牧場」に行きました。
酪農家の無念の想い将来の不安、その中でも希望の光として被災した酪農家の再雇用場となったと。自分の手放した牛たちは元気にしているだろうといつも思っている。手放す気持ちは相当な覚悟があったんだろうと思います。新たなビジネスとしてまた復興をめざし応援できることしようと思います。

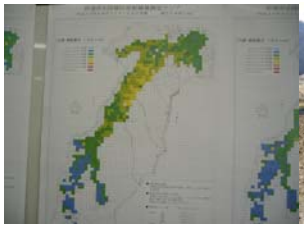
小国の方へ
　大変ありがとうございました.
福島から小国へ向かう車中、フレコンが多く目に止まりました。除染の袋でした。集会所の花壇も除染した後でした。原発の事故さえなければと思いは強い。
みなさんが言ってました・・・見えない、におわない恐怖。震災直後被害がなくよかった～と。それも束の間で生活が一変。農産物のあらゆるものに汚染し「食べる事」「差し上げる事」「売ること」もできなくなったと。
ホットスポットになっている箇所もあり、線量が高くなっているそうです。農産物はもちろん出荷制限・自粛。水田や畑はどうなるだろう？住み続けるために学び、努力しなければならない。空間線量が問題でもあり、仕事も長時間できない。という事は農業を営むのは難しいことになります。。。２年たっても何も変わっていない。どこに頼ろうとしてもやってくれないんですよね。自分たちでやらなければおそらく町はなくなってしまうのではないか？と思ってしまいます。それに加えどうにもならない苛立ちがお隣同士や近所に向けられコミュニティー崩壊の危機となっているのです。これは他人事ではなく、何かあれば自分たちの場所も同じようになるのではないだろうか？助け合う事の気持ちも失うのだろう。
復興の仕方にも疑問を感じます。作付奨励金を出し補償しますよと言いますが、やる気を失わさせ町を衰退させる一方です。一年・二年・三年休み農業を簡単に再開できますか？よほどの気持ちと体力がなければできません。別な方法で復興できるのにと思います。
そんな中でも、続けようとしている方々の努力はきっと身を結ぶはずです。

今回、研修を通し現場での声を聴き見方が変わりました。一緒になってやっていかなくてはならないですよね。私にできる事はわずかながらですが、TV では報じられていない現実を伝えていこうと思います。さっそく全道の若手女性ネットワークでもメーリングリストを流しました。みんなもっと聞いてみたいと言ってくれました。それにこれから伝えるためにも教えてほしいと言ってくれる人も。

今回お世話になったみなさんへ
　忘れてはいません！！何か農業者としてできる事模索していきたいと思います。
また、こうした対話が続いていくことを願っています。
また、たくさんのおいしい昼食におやつにありがとうございます。心からのおもてなしに感謝します。

見てきたこと、感じたことをどう伝えるべきか？それが課題ではありますが、自分のすべきことだと強く思います。

以上



主催　RIRiC 2
「市民参加型で暮らしの中からリスクを問い学ぶ場作りプロジェクト」
JST 科学コミュニケーションセンター平成 24 年度採択企画
【代　表】小林国之　北海道大学大学院農学研究院　助教
【事務局】北海道大学農学研究院内　学術研究員 平川全機／吉田省子
【連絡先】〒060－8589　札幌市北区北 9 条西 9 丁目
北海道大学大学院農学研究院　札幌サテライト内
E-mail riric@agr.hokudai.ac.jp